

天女の遊び歌(2)

—バリ島の憑依儀礼に表れるカミ観念をめぐって—

嘉 原 優 子*

(本稿は『中部大学人文学部研究論集』第2号(1999年7月)に発表した「天女の遊び歌(1) —バリ島の憑依儀礼に表れるカミ観念をめぐって—」の続編である。)

(1) ヒンドゥー・バリとヒンドゥー・ダルマ

1945年、インドネシア独立宣言後、政府は多様な文化を持つ民族の統一を目指し、5つの原則を掲げた。パンチャシラ(Pancasila)と呼ばれる国是である。現在のインドネシアでは、このパンチャシラを国家の存立原理にして国民生活の源泉をなす最も重要な基礎として位置づけている。それらは、①唯一神への信仰、②公平で文化的な人道主義、③インドネシアの統一、④協議と代議制において英知によって導かれる民主主義、⑤インドネシア全人民に対する社会正義、である⁽¹⁾。中でも重要視されたのが、「唯一神への信仰」である。これは、インドネシア国民はどの宗教を信奉しても良いが、それは必ず唯一神を奉じる宗教でなければならないというものである。当初、唯一神を持つ宗教として政府に公認されたのは、イスラム教、カトリック、プロテスタントであった。バリのヒンドゥー教は、スラウェシやイリアン・ジャヤ

* 人文学部講師 — 宗教人類学

の精霊信仰や民俗宗教と共に「その他の信仰」に分類された。唯一神を持たぬ未発達の土着信仰であるとみなされたのである。

現在バリ人が信奉する宗教は、正式には「アーガマ・ヒンドゥー・ダルマ (Agama Hindu Dharma)」と呼ばれている。アーガマとは宗教、ダルマとはなすべき正しい行いといった意味である。しかし通常バリ人が他者から宗教は何かと問われた場合、「ヒンドゥー・バリ」と表現することが多い。これは「バリのヒンドゥー教」といった程度の意味である。現在のバリ宗教の正式名称のひとつである「ヒンドゥー・ダルマ」は、インドネシア独立以降、バリの宗教界の指導者層がヒンドゥー・バリの教義を体系化し、聖典を作り、1962年にバリのヒンドゥー教がインドネシア政府に「宗教」として認められた際に、採用されたものである。晴れて唯一神を持つ宗教の仲間入りを果たしたバリの宗教であったが、現在でもその信仰生活の中にはアニミズム的側面や多神教的側面が示されている。しかしながらバリ人は、それを指摘されることを非常に嫌い、必ず次のように説明するであろう。「我々の神は唯一至上神であって、あなたが道端や寺院でみている多くの神々の姿は、その至上神が、その場その時にふさわしい姿をとって現れたものにすぎないのである。」

バリの村では、母から娘へ供物の作り方が伝わり、父から息子へ儀礼用の料理の作り方が伝えられる。子供たちは家族とともに村の寺院での祭司に参加して、見よう見まねでどのように神に祈りを捧げるのかを習得していく。家庭内で行われる神迎えの儀礼や人生儀礼などに際しては、事前にその手順を理解している人はほとんどいない。儀礼当日、やってくる祭司に手順を指示されながら儀礼を進めていくが、なぜその手順に従わなければならないかを問う人もいない。彼らにとって、行為そのものが目的なのであり、一つ一つの行為の意味を知る必要はなかったのだ。

インドネシア・ヒンドゥー教評議会：パリサダ (Parisada Hindu Dharma Indonesia) を中心に、伝統的宗教活動に意味を与える教義が整備され、1967年には教義概説書である『ウパデサ (Upadeśa)』が刊行された。現在では、多種多様なヒンドゥー教関係の書籍が出版され、一般の書店ではもちろんのこと、ちょっとした村の寺院祭祀においても、たいていそれらの書籍を並べ

る夜店がたつ。しかも安価で誰もが気軽に入手できる。おびたしい種類の供物の一つ一つが持つ意味を説明する『供物用語事典』や、正しい祈り方を解説する『祈祷指導書』、バリ中の大規模な寺院の由来を伝えるもの、どの儀礼でどの歌を歌うべきかを説いたもの、様々な儀礼ごとの手順と意味を示すものなど、数十ページの小冊子を中心となるが、その種類は多様である。研究者にとっても有益な資料となるが、実際には、村での理解との間に食い違いがみられることが多い。

バリの宗教はきわめて煩雑な儀礼の総体であるが、ヒンドゥー・ダルマは、それらの儀礼を五つに分類した。これをパンチャ・ヤドニャ (Panca Yadnya) と呼ぶ。『ウパデサ』によると、その五つとは、デワ・ヤドニャ (Dewa yadnya)、ピトラ・ヤドニャ (Pitra yadnya)、リシ・ヤドニャ (Rsi yadnya)、ブタ・ヤドニャ (Bhuta yadnya)、マヌサ・ヤドニャ (Manusa yadnya) である。デワ・ヤドニャとはデワと呼ばれる神々や祖霊へ供儀と祈りを捧げる儀礼であり、ピトラ・ヤドニャとは死者を祖霊の段階まで浄化するための儀礼である。ブタ・ヤドニャはブタと呼ばれる地下界の悪霊へ供儀を捧げる儀礼であり、マヌサ・ヤドニャとはマヌサ、すなわち人間の人生における諸段階において行われる儀礼である。また、普通の人間から宗教的な存在、リシすなわち祭司などになる際に行われるのがリシ・ヤドニャと呼ばれる⁽²⁾。

このパンチャ・ヤドニャや五つのヤドニャそれぞれについても、多くの解説書が出されている。しかし、どの儀礼がどのヤドニャに分類されるかについては、すべての解説書が一致した説明をしているわけではない。これは、儀礼の分類基準が曖昧なのと、バリの儀礼が、上記のそれぞれのヤドニャの二つ以上の性格を併せ持つ場合が多いからである。いうまでもなく、パンチャ・ヤドニャの分類は、儀礼そのものに先立って存在していたものではない。人々の中に漠然とあった儀礼への理解が、ヒンドゥー・バリからヒンドゥー・ダルマへと移っていく間に、宗教上の指導者の努力によって成文化されたものである。

バリ人の社会的行為や経験の一定の局面が「宗教」という文化的カテゴリー化を受けるあり方は複合的であり、少なくともそれには二つの様相がある

と指摘されている。一つは「ヒンドゥー・ダルマ」というカテゴリーの下に括られる「宗教」の様相であり、もう一つは「バリ・ヒンドゥー」の「伝統」というカテゴリーの下で文化的な規定を受けているバリ人の宗教的活動と、その他の宗教に直結しない文化的活動の総体が示す「宗教」の様相である⁽³⁾。

そのような二重の意味を持つ信仰生活の中、現在のバリ人にとって神とカミはいかなる存在となっているのであろうか。ここでの神とは、ヒンドゥー・ダルマの唯一至上神サン・ヒャン・ウィディのことであり、カミとはバタラ・バタリ (Bhatara-Bhatari), デワ・デウィ (Dewa-Dewi) を始め、ヒンドゥー・バリの伝統の中で、頻繁に供物と供犠と祈りが捧げられてきた多くの超自然的存在、神的存在のことである。本稿で取り上げているサンギャンも後者に入る。

まずヒンドゥー・ダルマにおいて、次にヒンドゥー・バリにおいて、それぞれ神とカミがどのように語られているかを以下で概観する。

(2) ヒンドゥー・ダルマにおける神とカミの解釈

バタラ・バタリ, デワ・デウィとは神・女神という対になる神々をさし、個々の神々は、たとえばバタラ・スリヤ (Bhatara Surya 太陽神), バタリ・サラスワティ (Bhatari Saraswati 学問と芸術の女神),あるいはデワ・スリヤ, デウィ・サラスワティと個別名を続けて示される。『ウパデサ』では、バタラ・バタリ, デワ・デウィと、唯一至上神サン・ヒャン・ウィディとの違いとその関係が語られている。『ウパデサ』は、その大部分を通じて聖人ダルマクルティが、弟子スヤサの宗教上の疑問に答えるという形式をとっている。

聖スヤサは言った：

先生、私にはまだはっきり分からない事があります。サン・ヒャン・ウィディとは、デワやバタラと同じでしょうか？

聖人ダルマクルティは答えた：

いいや、弟子よ。サン・ヒャン・ウィディはデワやバタラと同じではない。デワとは、すべての生き物の生を完全なものにする聖なる力を与えるサン・ヒャン・ウィディの聖なる光の具現である。デワはサン・ヒャン・ウィディではない。それはサン・ヒャン・ウィディの光に過ぎない。デワという言葉は、サンスクリット語の“DVI”，光という意味に由来している。

したがってデワとは「光り輝く」という意味である。一方、バタラとは、創造物に庇護を与えるサン・ヒャン・ウィディの力の具現である。バタラという言葉は、サンスクリット語の“BHATR”に由来する。その意味は「庇護」である。デワとバタラは、ほぼ同じ意味で使用されている。たとえば、デワ・ウィスヌはバタラ・ウィスヌとも言われる。なぜならば、ウィスヌ神はすべての生き物を庇護しているからである。また、すでに亡くなった偉大なる王や我々の祖先に対しても、バタラという称号を与えている。なぜならば彼らもまた私たちを庇護するからである⁽⁴⁾。

ここでは、デワは「聖なる光」、バタラは「庇護するもの」であり、両者はほぼ同じ意味で使用されていると説明した上で、それらの上位にサン・ヒャン・ウィディを位置づけている。ヒンドゥー三大神の一角をになう維持神ウィスヌは、ヒンドゥー・ダルマにおいてはサン・ヒャン・ウィディの多くのマニフェステーションの一つに過ぎない。あえて、この文章から読み取ることのできるデワとバタラの差違を探索せば、「庇護」という属性を持つか持たないかという点である。デワとはバタラよりもより広い概念であり、デワに「庇護」の性格が加わった場合にバタラと呼ぶと理解できる。

サン・ヒャン・ウィディとは、創造するもの、維持するもの、破壊するものとして、全能の偉大なる存在である。それは唯一の存在であり二つとない。人間は、それをその時々機能に合わせて多くの名前呼び表しているだけである。サン・ヒャン・ウィディとは、ブラフマン(Brahman)であると同時に、創造神ブラフマ、維持神ウィスヌ、破壊神シワの三位一体の力、トリサクティであり、トリサクティの現れは、あらゆるサン・ヒャン・ウィディの具現の最上位に位置づけられている。そして、全知全能のサン・ヒャン・

ウィディの姿は、たとえば昼間に星を見ることができないように、われわれ人間には見ることができない。そこに確かにあるにもかかわらずである。

聖人ダルマクルティは、偉大なる王や祖先の霊をもバタラであると説くが、『ウパデサ』においては、この他にはピトラ・ヤドニヤで火葬の手順等が述べられるだけで、それ以上の祖霊に関する記述は見られない。

共同体を越えてバリ人を庇護するバタラやデワ以外に、祖霊もまた、バリ人の生活に大きな影響を与えるカミである。祖霊を祀るための建物は、バリンゲ・イブ（*pelinggih ibu*）と呼ばれ、たいてい寺院の中央に位置することから、バリ人が祖霊をきわめて重視していることがわかる。バリ人は、死者の霊を少なくとも三つの段階において理解している。たとえ父母であっても死後間もなくの霊は単なる死霊である。バリにおける葬送儀礼は、莫大な費用と長い時間が費やされることが多い。近年では経済的事情や個人の考え方によってかなり柔軟な方法で行われるようになってきてはいるが、基本的に、遺体は何度も繰り返し聖水で清められた後、火葬される。そして、火葬後の灰や儀礼に使われた供物は、すべて海へと流される。こうして様々な手順を踏んだ後、はじめて死者の霊は浄化され祖霊となって定期的に子孫に祀られる存在となるのである。さらにこの後、祖霊を神格化するための浄化儀礼を行うことによって、個々の祖霊は他の祖霊の集合体と合一化し、祖霊神となる⁽⁵⁾。

しかし、何らかの理由で、一連の葬送儀礼による浄化が完了していない死者の霊も多い。祖霊神格化の浄化儀礼が済んでいない場合や、埋葬後、火葬されないままに長期間経過した場合もある。後者の場合、問題は深刻である。バリ人は埋葬された死者の霊はできるだけ早く火葬をしてくれるように地下で待っているという。死者の霊が地下で静かに待ってくれる時期はせいぜい一、二年であり、残された子孫たちもできるだけこの期間のうちに埋葬した遺体を掘り起こして火葬する努力をする。それでも、様々な事情でなかなか火葬が行えない場合もある。時には何らかの事情で火葬されないまま放置されている遺体もある。そこには浄化されない死霊の怨念が渦巻いている。なぜならば彼らは、バリンゲ・イブで祀られることがないからである。そして、

祀られることのない死霊は、やがて悪霊となって自らの子孫に祟るのである。バリ人が病に倒れたり、不幸が続いたりする場合、呪術師にその原因を見もらうことがよくあるが、その原因の多くがそういった祀られなかった死者の祟りであると診断される。祖先の霊は、バリ人にとっては最も身近な、災いの原因をもたらすものなのである。

(3) ヒンドゥー・バリを背景とするサンギャン儀礼のカミについて

T村で行われたサンギャン儀礼は、バンチャ・ヤドニャのどれに分類されるのであろうか。招聘されるのはいったいどのようなカミなのであろうか。村人は何のために祈るのであろうか。

ヒンドゥー・バリは伝統的習慣であり、生活の一部であった。一方でヒンドゥー・ダルマは宗教アーガマであり、教義である。かつては一部の宗教的立場にある人々の間でのみ理解されていたヒンドゥー・ダルマの教義が、昨今、さまざまなメディアを通してますます一般の人々に浸透していく中で、ヒンドゥー・バリの伝統の中で細々と行われているサンギャン儀礼を、村人はどのように受け止めているのだろうか。彼らにとってサンギャンとはどのようなカミなのであろうか。

この節では、バリ島T村のサンギャン儀礼で歌われる歌や儀礼進行過程において踊り手が示す所作を通して、そこに表されるバリ人のカミ観念を考察する。

(a) これまでのサンギャン儀礼理解

まず表記上の混乱を整理しておこう。「サンギャン」という語を辞書で引くと、sangiang, sanghiang, sanghyang, Sang Hyang 等のさまざまな綴り方がみられる。これまでの研究では、トランス状態での踊りを中心とした儀礼を Sang Hyangあるいは Sanghyang と示すことが多かった。それらの日本語訳では「サンヒャン」という表記がもっとも頻繁になされ、他に「サンヤン」

「サンギャン」という表記法もある。バリ人が「サンヒャン」という場合は、サン・ヒャン・ウィディをはじめ、高位の神々を呼ぶ際に個々の神々の名称の前に称号として用いる場合が多い。サン・ヒャン・ウィディをサンギャン・ウィディと呼ぶこともあるが、儀礼としての「サンギャン」をサンヒャンと呼ぶことはほとんどない。バリ人が為した文献に、「サンギャン」儀礼を Sang Hyang と表記している場合もあるが、これは海外の研究者による一般的な表記法のひとつを盲目的に取り入れているにすぎない。実際の儀礼において、使われる語は「サンギャン」である。本稿でサンギャンと表記する場合は儀礼としてのサンギャンを指している⁽⁶⁾。また、混乱を避けるためにアルファベット表記では「サンヒャン」と読むのが自然な場合も、儀礼についての解説であれば「サンギャン」と統一表記をする。

そもそもバリにおいて、儀礼としてのサンギャンはどのように理解されていたのだろうか。バリ人によって書かれた文献の多くがサンギャンを舞踊として取り扱っている。まず『バリ舞踊事典』⁽⁷⁾では、サンギャンとは前ヒンドゥー文化が残した財産であるバリ舞踊の一つで、トランスを伴う舞踊であるという。踊り手は、ヒャンと呼ばれる精霊に憑依され、正気を失った状態で踊る。バリに残る古い文献には、サンギャン舞踊は災害や天然痘などの伝染病を祓う舞踊であると述べられている⁽⁸⁾。サンギャンには、本稿で主として取り扱うサンギャン・ドゥタリ (天女) 以外に、サンギャン・ジャラン (jaran: 馬), サンギャン・ムムディ (memedi: お化け), サンギャン・デリン (deling: 人形), サンギャン・サンパット (sambat: 箒), サンギャン・ボジョッグ (bojog: 猿) などのバリエーションが見られ、合わせて20種類以上のものが報告されている⁽⁹⁾。サンギャン儀礼の一つであるドゥタリ: 天女は、天界に住む踊り手で、シワ神とその妻ウマの交合中にこぼれ落ちた精液からドゥタリ: 天人とともに誕生したという。サンギャン舞踊は、かつてはムチャル儀礼 (供犠をともなう浄化儀礼) やバタラ・ガナ・クマラという神と関係を持つその他の寺院祭祀でみられるものであった。村の中で地下界の悪霊ブタ・カラが騒ぎ立てる伝染病の季節には、供犠を捧げ、バタラ・ガナ・クマラの社を置いてサンギャン舞踊が行われたのである。ブタ・カラはサンギヤ

ン舞踊を見ることが大好きだが、見終わった後に、その場に悪を追い払うシンボルであるバタラ・ガナ・クマラが祀られているのを見て驚き、慌てふためいて逃げるといわれている。バタラ・ガナ・クマラは、障害(差し押さえ)の神といわれており、あらゆる災害や不幸といった敵を追い払うものである。だからこそ、伝染病やその他の前兆がバリにあった場合にはサンギャン儀礼が執り行なわれ、その村が災害やその他の病気の蔓延を忌避し、繁栄するようにとの願いを込めて選ばれた少女が、村人とその祖先とを結ぶ仲介者として踊るのだという⁽¹⁰⁾。

サンギャン儀礼はパンチャ・ヤドニャのどの範疇に分類することができるだろうか。災害や病気や悪霊といったあらゆるマイナス要因を祓うという目的やムチャル儀礼において行われたということから判断すれば、それはブタ・ヤドニャであると考えられる。また天界に属するドゥダリを招くことを考慮すれば、デワ・ヤドニャとしての性格も併せ持つといえるであろう⁽¹¹⁾。しかし、T村の人々は、サンギャン儀礼をブタ・ヤドニャとして捉えてはいない。いや、むしろ、村人の意識の中では、サンギャン儀礼とパンチャ・ヤドニャといった分類は結び付いていないのである。サンギャン儀礼は、ヒンドゥー・バリの伝統の中で行われており、パンチャ・ヤドニャといった概念を持つヒンドゥー・ダルマの教義で説明しようとする、たちまちのうちに違和感が生ずるのである。

(b) タバカンに降臨するカミ

T村の人々は、サンギャン儀礼の初めに、田んぼの中にあるサンギャンとなる踊り手を選ぶために存在する寺院ブラ・サンギャン・クラカで祈祷歌を歌いつづける。そして長い儀礼が終わった時に再び同じ寺院に戻り、少女に降臨したカミを天界へと送り返すため神送りの歌を歌うのである。彼らが呼びかけたのはいったい何に対してだったのだろうか？

儀礼初日にブラ・サンギャン・クラカ内で歌われた神迎えの歌を訳すと以下のようなになる。

ブングクパン（祈祷：神迎えの歌）

- ある日 木々の生い茂った山で 雨が降った
その時は満月だった
色とりどりの花を準備するのを忘れてはいけない
- しっかりとやりましょう いつも覚えているように
朝に昼に低地や谷間に咲く香り高い花々を見ましょう
- 美しい天女は王のような衣装をまとっている
とがった花で飾られた腕輪と指輪をしている
そして偉大なる神を崇める 神は団扇を使い
きらきらと輝く宝石で飾られた腰布をまとっている
- 天女たちが天の国から舞い降りる
香り高く咲く花々を見ながら しもべたちはすぐに寺院に降りて
きて休んでいただくようお願い
- サンギャン・サンパットよ
今すぐに降りてきて踊って下さい
- 天女たちが前になったり後ろになったりしながら降りてくる
- スリ・アユは侍女たちを従えて楽しそうに北へ行く
- 天女たちは すぐに眠るように撫ぜられ 促される
- たった今 その目の前に祈られて飛んできた インドラ神よ
降りてきて下さい 天女たちはサンギャンに使われる
- たった今 飛んできて促される
さあ 早く早くトランスに入るようにと 祈りが捧げられる
影がきらきら光って見え うっとりするような詩の朗唱の響きが
聞こえてくる 踊っている時 ほっそりした腰は影のようだ
- 白檀の木の香炉を使って 神々に祈りを捧げる
なぜまだ降りて踊ってはくれないのか
オレッグ（代表的な女性舞踊）の踊り子のように踊って下さい
紫の絹のオンチェールを持って
- とても美しい黄色い孔雀の羽で身を飾り

優しく揺れながら庭で踊る

神迎えの歌の中に登場するのは、「天女」、「偉大なる神」、「しもべ」、「サンギャン・サンパット」、「スリ・アユ」、「侍女たち」、「サンギャン」である。何度も繰り返し歌われる天女は、単数の場合と複数の場合があるが、あまたの天女たちの中でもひとときわ地位の高い天女がおり、単数系で表現する場合はこの地位の高い天女を指すようである。その天女は、スリ・アユと呼ばれており、他の天女たちを従えていると解釈できる。天女たちが崇める偉大なる神とは、その後にも歌われているインドラ神のことであろう。前節でみたように、ドゥダリやドゥダラはシワ神とウマの子供であるという記述もあるが、T村においては、天界を支配するインドラ神こそが天界に住むドゥダリを統括していると考えられているからである。スリ・アユという表現であるが、スリとはバリ人に馴染み深い稲の女神の名称である。アユとは、美しいという意味であり、女性名としてよく用いられるが、任意の美女を指す場合もある。T村では、サンギャン儀礼が稲穂が色づいたところに行われていることから、スリ・アユを稲の女神デウィ・スリと捉えていると考えるのが適当であろう。スリ・アユは、多くの他の天女を侍女として従えているようだ。その天女たちの降臨を希っているしもべは、いうまでもなく村人である。しかし、村人は直接的には天女に接触することはできないようで、サンギャン・サンパットという仲介のカミを立てる。サンギャン・サンパットとはブラ・サンギャン・クラカ内でタバカンとなる少女を選ぶ際に用いた箒状の供物である。サンギャン・サンパットが中心となるサンギャン儀礼も他地域では存在するが、T村ではサンギャン・ドゥダリとなる少女を選ぶために用いられているのである。⁽¹²⁾

歌意を取りにくいのは「天女たちはサンギャンに使われる」という箇所である。天女とサンギャンの関係がはっきりしないのだが、天女たちというのは、儀礼の中でサンギャン・ドゥダリとなった少女に指名されて彼女と共に踊る他の少女たちを指し、サンギャンとはサンギャン・ドゥダリとなった少女自身を指すと考えることが可能ではないだろうか。つまり、ひとりのより

高位の天女が、他の多くの天女たちを従えて村に降臨する。前者はトランス状態となった少女に降りて儀礼の中心となり、後者は儀礼を行う場に参加したそれ以外のやはり初潮前の少女たちに降りるのである。儀礼進行表⁽¹³⁾からは、一晩で行われた19演目のうち少年のみが選ばれたのはわずか一演目であったが、少女のみが選ばれサンギャン・ドゥダリのお供をして踊ったり、遊んだりしたのは11演目にのぼった。それ以外の演目では男女ともに選ばれているが、全体としてみると圧倒的に少女がサンギャン・ドゥダリをサポートする場合が多い。トランスに陥った少女以外の少女たちにも天女は訪れると考えてよいのではないだろうか。

(c) サンギャン儀礼歌に登場するカミ

儀礼中に歌われる歌の中には、稲の女神ブトラ・スリ⁽¹⁴⁾、偉大なる神イダ・グデ、プトゥス神、ガーナ神といった神々や、トゥンジュン・ビル、スプラバ、ロ・タマといった天女たちが登場する他、様々な動植物や事物が歌い込まれている。注目すべき点は、農耕と関わりをもつ事物がきわめて多く取りあげられているということだ。たとえば、タイトルだけを見てもドゥダリ・バラン・ミニャックでは作物を荒らす害虫が、ドゥダリ・ルンルンガン・ランビットでは折れた鋤が、ドゥダリ・パンセッグでは種を植えつけるために地面に穴を開ける棒が歌われている。他に、農耕との関係が明らかなものとして、ドゥダリ・ウォット（籾殻）、ドゥダリ・カクル（田にいる虫）、ドゥダリ・ジュブル（田やあぜ道にいる食用にもなる虫）、ドゥダリ・ングランビット（鋤などで土地をならすこと）、ドゥダリ・ブルチン（おたまじゃくし）をあげることができる。また歌詞の中に農耕との関係が歌われているものもある。たとえばドゥダリ・クレニェット（おしゃべりなこと）では、牛に鋤を引かせる時に首にかける道具が歌われている。

ここでT村におけるサンギャン儀礼をめぐる記述を思い起こしていただきたい。まず、儀礼は四回の田植えに一回の割合で行われ、儀礼は稲穂が黄色く色づき始めたころに開始された。サンギャン・ドゥダリとなる少女を選ぶ場所は田んぼの中にある寺院であり、そこでは水を司る女神ラトゥ・マニッ

クを祀っている。そして、寺院で歌う神迎いの歌の中では稲の女神ブトラ・スリに降臨を促す内容が歌われているのである。

また、かつてサンギャン儀礼は、村の寺院ではなく、市場のたつところで行われたという。現在の場所、寺院のワンティランで行われるようになったのは1960年頃からである。バリの市場には必ずデウィ・ムランティン(Melantin)という女神が祀られているが、この女神は稲の女神デウィ・スリの娘であり、種子と植物の健やかな成長を司るとされている。デウィ・スリはウイスヌ神の妻であり、農業と豊穡の女神とされ、美しいこと、良きことの象徴である。しばしば絵や彫刻の題材として取り上げられるが大変美しい姿で表され、外国人観光客のみならずバリ人にも人気の高い女神である。この女神は、ヒンドゥー教の到来によってバリにやってきたのであり、もともとバリにいた種子と植物の女神であるデウィ・ムランティンの上におかれたのではないかという見方もあるが⁽¹⁵⁾、いずれにせよ儀礼を市場で行うということは農耕との関係を持つことになるのである。

これまでのサンギャン儀礼研究では、疫病や災害を祓うという目的が強調されてきた。おそらくサンギャン儀礼全体を通して見た場合は、悪霊祓いといった性格がもっとも顕著にみとめられるであろう。しかし、サンギャン・ドゥダリ儀礼についてのみを取り上げると、そこには豊かな実りを願う人々の祈りが何よりもまず認められるのである。

(d) 憑くカミと憑かれる者

サンギャン儀礼は憑くカミとそれを身に受けるタバカンがいて成立する儀礼であるが、T村のサンギャン・ドゥダリをはじめ、多くのサンギャン儀礼ではカミが人間に憑依する方法は間接的であって、直接カミが人間に憑依するものはむしろ少ない。ほとんどのサンギャンが必ず何らかの祭具を使って、カミに憑依されるのである。言い換えれば、それらの媒介物がなければタバカンはトランスに入ることはできず、したがって儀礼は成立しないということである。

T村での場合、サンギャン・サンパットがサンギャン・ドゥダリとサンギ

ヤン・ドゥダリをその身に受け入れる少女の間の橋渡しを行っていた。このような傾向は他地域の他の種類のサンギャン儀礼でも頻繁にみられる。たとえば、バリ北部の山岳地帯でのみ見られるサンギャン・デリンは、サンギャン・ドゥダリと同じく初潮前の少女によって踊られるものであるが、その少女たちにカミを降ろす際にニツパヤシの葉で作られた一対のデリンと呼ばれる人形を使用する。2本の柱を結ぶ糸にぶら下げられた人形が踊り出すことによって村人はカミの降臨を知る。やがてそのカミは糸を伝わって、それぞれの柱を握り締めている2人の少女へと入っていくのである。2本の柱を結ぶ糸にぶら下げて使用する供物は多く、他に、サンギャン・ククル (kukur: 鳥の一種)、サンギャン・ルスン (lesung: 臼)、サンギャン・センベ (sembe: ランプ) でも同様の方法がとられている。それ以外のサンギャンでも何らかの祭具を用いることが多い。時には、それが臼であったりポットの蓋といった台所用品であることもあって驚かされるが、それらは食べ物を生み出すものであり、人間によって作られた道具でもある。自然と人間の間に立ち、人間でも自然でもない、だからこそ豊穡祈願のために自然と人間を結び付けるものとなり得るのである。

タパカンとはカミをその身に降ろして宗教的活動を行う人々のことである。これは、サンギャン儀礼における霊媒をも指すし、民間で病の治療に当たる呪医のことを呼ぶこともある⁽¹⁶⁾。サンギャン儀礼においてはタパカンとはただの入れ物であり、信仰の対象はタパカンに降りたカミであってタパカン本人ではない。したがって、儀礼中は大切に扱われても儀礼が終われば普通の村人となら変わらない。

バリ人の宗教は聖水の宗教アーガマ・ティルタと称される。その宗教において、もっとも重要なものが聖水ティルタであり、人々が祈る際には欠かせないものとなっている。そしてまたこれもよく見かける事だが、その核心ともいべき聖水が清涼飲料水のボトルに入れられているのだ。もちろん真鍮製や銀製の美しい彫りを施した聖水入れがないわけではない。しかし、多くの場合バリ人は聖水の容器に注意を払わない。それはコーラの空き瓶であってもかまわないのである。中に入る聖水の価値がそれを入れる容器で貶めら

れるという事はまったくない。人々が求めているのは聖水そのものであり、聖水を授かることこそが彼らの祈りが神に届けられたという証しなのである。容器などはどうでもよいのだ。

同様な事がサンギャン儀礼にも言える。人々が祈りを捧げているのはタバカンに降りて来たカミに対してであって、タバカンにではない。カミが降りる場所を提供してくれるのであればそれは誰でもよいのである。

タバカンの身につける衣装には様々な工夫が施されている。まず胴衣がピスチェのように縫われ、後ろファスナーによって容易に着脱することができる。通常、踊りの衣装では、10cm程度の幅の帯状の布を腰から胸にかけて巻き上げ、その長さは7、8mにもなる。美しく巻くにはそれなりの時間がかかり、慣れや技術も必要である。儀礼初日のタバカンは、まったく意識のない状態のままワソティランに運ばれ衣装を着けられた。彼女の体が少し大きかったため、工夫された胴衣を身に着けることさえかなり困難であった。これが、通常のように帯状の布であったならば、その作業は絶望的なものになったであろう。また、冠の後部を覆う布は、すべて布で作られた造花であった。依頼を受けて幾ばくかの謝礼をもらう半ば専門的な舞踊家の場合、あまりに忙しいとその都度花を集めたり、冠を飾ることで時間が取られてしまうので、いざという時のために造花を準備している者も中にはいる。しかし、共同体内部で行われる儀礼で冠に造花を使うことは非常に珍しい。わずかに左右に挿す円錐状の花飾りだけは、踊るたびごとに新鮮なブルメリアの花が用いられている。白い布で作られた冠後部の造花は薄汚れ、白い生花と対照的である。こういった手続きの簡略化は、一見、宗教的精神性が希薄になってきているかのようなイメージを与えるかもしれない。しかし、村人にとっては、それは大きな問題ではないようだ。形や外見にこだわらないことがバリ人の宗教活動に対する基本的姿勢であると思われる。

そうであれば、カミの容器であるタバカンに特別な念を感じることはないということも理解できる。

一方、ヒンドゥー・ダルマでは、目に見える部分へのあるべき姿が言及される。祈りを捧げる時は真っ直ぐ前を向いて背筋を伸ばしていなければなら

ないし、寺院に入る時は正装をしていなければならない。男性は頭にウドゥン（udeng: 鉢巻き）を巻かなければならないし、女性のブラウスは黄色が好ましい。しかし埋葬儀礼に限っては黒の衣装を、祖霊神格化の儀礼では白の衣装を身に着ける方がよい…などといったことが説かれている。ヒンドゥー・ダルマは行為の意味だけでなく、形や外見にもこだわるのである。

伝統的宗教活動であるヒンドゥー・バリとその活動に意味を与えるヒンドゥー・ダルマのはざまで、バリにおける若い世代のカミ観念が揺らいでいる。現在のバリは、異なるカミ観念が併存する状態である。そのような状況は、ひとりの人間の中でもみられるし、異なる世代間でも起こっている。小学校やそれに続く教育機関でヒンドゥー・ダルマ教育を受けた若い世代では、サンギャン儀礼で降臨するカミを信じることはできても、自分の身にカミを降ろすことはできない。カミが降りることは信じられても、そのカミの存在は信じるのができても、自らにカミを受け入れることはすでに困難になりつつあるのである。

むすび——天女はどこへ…

ブトゥ・スティアの『バリ案内』では、バリ島で生まれ育った父親と3歳でジャワに移り、そこで育った小学校5年生の彼の娘リニの次のようなエピソードを紹介している。

家族とともにバリに戻ってきたリニは、祖母や叔母に連れられて礼拝に行く。リニが5回拝んで礼拝をしたのを見て、祖母たちは驚き「ずいぶんたくさんするんだね」と尋ねた。するとリニは、礼拝をする時は必ず5回しなければならない、これをパンチャスンバーというのだと講釈を始めた。さらにリニの弟は「パンチャスンバーなんて小学校2年生で習うことだよ」と言ったのである⁽¹⁷⁾。

バリに住む祖母や叔母たちは習慣から礼拝の仕方を覚え、ジャワに住むリニや弟は小学生向けのヒンドゥー教の教科書から学んだ。そして、それを正

しいものとして、日々ヒンドゥー教徒として生活の中で祈りを捧げてきた祖母たちの仕方を間違いだと言うのである。

バリで生まれ、バリで育った子供たちにも、同様なことが起こり始めている。物覚えがつく頃には、村の祭りに連れて行かれ、両親とともに祈りを捧げた子供たちは、小学校にあがると、自分たちがしていることの意味を教えられる。村や両親からは習わなかったことだ。教科書では、バリ島の様々な儀礼を五種類にわけ、それぞれが何のための儀礼であるかを教えている。しかしながら、その分類に入れられていない儀礼も数多く存在する。サンギャン儀礼もその一つである。何のための儀礼であるか、その意味を教えられないもの、教科書に載っていないことに対して子供たちは違和感、不信感を抱く。はたしてこれは正しいヒンドゥー教なのだろうか。

実践宗教としてのバリ・ヒンドゥーと、理論武装をしたヒンドゥー・ダルマの間で、若い世代のカミ観念に変化が起こっている。信じることはできるのだが、もはやカミは彼らには降りようとしな。サン・ヒャン・ウィディが唯一至上神であると小学校の頃から教育された少女たちは、思春期を前にタバカンとなってカミの容器となることを恐れ、時には恥じている。一方で、中年層以上の人々にあっては、特に必要に迫られない限り、宗教理論を学ぶ必要は感じていないようだ。たとえ学んだとしても、それは、彼らの中で長きに渡って積み重ねられてきた実践知にまさるものではない。あと一世代もすればサンギャン儀礼を伝承するものはいなくなるであろう。バリに天女が舞い降りなくなる日は近い。その時、アーガマ・ヒンドゥー・ダルマはどのような理論をもって人々を救い、守るのであろうか。

本稿を閉じるにあたって、カミを天界へ帰す際に歌われる歌を挙げよう。

ムンガー（昇天：神送りの歌）

——もう飽きてしまった もう疲れてしまった

金で飾られた供物スンプがある

——神よ 東北の方向へ行かれよ

ガドゥンの花とムラティの花の彫刻が施された

- コリ・アグン（伝統的な門）に入られよ
 ——サンギャンよ チュンパカの木に上り
 プリンギンの木に降りられよ
 私はその場に行く
 サンギャンとは言葉を交わさない
 私が帰るとラトゥ・サンギャンは泣く
 ——アユ・ドゥダリ もう終わりました こちらに来て下さい
 あなたは天国に帰ります 私は家に帰ります
 ——幕を開けて 新しい幕を
 その幕にはとても美しい花々が描かれている
 ——黒い黒いマンゴスチンの実 もう花は摘まれてしまった
 黒いけれどもおいしく 微笑みは愛らしい
 白くても黄色くても何の役にも立たない⁽¹⁸⁾
 ——ラトゥ・サンギャン 昼の星が東の水平線に現れました
 ラトゥ・サンギャン その瞬間に玉ねぎは一気に花開く
 ラトゥ・サンギャン だから娘さんたち
 東で水浴をするのには気を付けなければなりませんよ
 若者がカパス・アングンの魔法⁽¹⁹⁾を仕掛けたから
 ——私は天国に帰りたい お土産は何？
 飾りのついた菓子を持って
 ——私は天国に帰りたい お土産は何？
 美しい絹の布と白いスレンダンを持って
 ——私は天国に帰りたい お土産は何？
 金の指輪と耳飾りと腕輪を持って

注

(1) 『インドネシアを知る事典』石井米雄監修，同朋社，1991年，356頁。

(2) “Upadeça tentang Ajaran-Ajaran Agama Hindu”, Parisada Hindu Dharma,

1978(1968), pp. 63-68.

- (3) 「現代バリ宗教の梯相論 ―意味システムの複合性に関する予備的考察」吉田竹也, 『民族学研究』56-3, 日本民族学会, 1991年, 297~307頁。
- (4) *op. cit.*, Upadeça tentang Ajaran-Ajaran Agama Hindu, pp. 16-17.
- (5) 各段階の祖霊を表す用語にはいろいろなものがあり混乱も見られるが, たとえば『バリ島民』(吉田禎吾, 弘文堂, 1992年) pp. 124-125の説明がある。
- (6) 詳しくは拙論「儀礼としてのサンギャン」(『神々の島バリーバリ = ヒンドゥーの儀礼と芸能』第5章として所収, 吉田禎吾監修, 河野亮仙・中村潔編, 春秋社, 1994年) 参照されたい。
- (7) Ensiklopedi Tari Bali, Bandem, I M.ed., Akademi Seni Tari Indonesia Denpasar Bali, 1983.
- (8) アグン山 (Gunung Agung) の神から聖人ムブ・クトゥラン (Mpu Kuturan) が賜ったとされるクチャチャール (Kecacar) というロンタル (ニッパ椰子の葉に書かれた文書) のこと。
- (9) 詳しくは Trance in Bali, Belo, J., New York, Columbia University Press, 1960, pp. や, Evolusi Tari Bali, Proyek Penggalan/Seni Budaya Klasik (Traditional) dan Baru, 1980/1981, pp. 5-12, 前掲書『神々の島バリーバリ = ヒンドゥーの儀礼と芸能』第5章「儀礼としてのサンギャン」を参照されたい。
- (10) *op. cit.*, Ensiklopedi Tari Bali, pp. 124-125.
- (11) 前掲書『神々の島バリーバリ = ヒンドゥーの儀礼と芸能』(第2章「バリの儀礼と共同体」中村潔, pp. 46-50) では, どんな儀礼においても複数のパンチャ・ヤドニャの性格を併せ持つことが多く, デワ・ヤドニャとブタ・ヤドニャにおいては, それぞれ神に向けての供犠と悪霊に向けての供犠といった正反対の要素を持つにもかかわらず, それらの要素は必ず同時に存在するということが指摘されている。
- (12) 本稿の前編となる「天女の遊び歌(1) ―バリ島の愚依儀礼に表れるカミ観念をめぐって―」『中部大学人文学部研究論集』第2号, 1999年, pp. 88-89を参照されたい。
- (13) 同上, pp. 101-118の表を参照のこと。
- (14) プタラと (Betara) はバタラ (Bhatara) と同意である。どちらもバリで一般的であるが, 地域によって多少綴り方と発音が異なるようである。『ウパデサ』では一貫して「Bhatara」と表記されているが, T村ではBetaraと綴られ「プタラ」と発音されるので, ここでは村の方法にしたがって「プタラ」と表記する。
- (15) Island of Bali, Covarrubias, M., Oxford University Press, 1972 (1937) (『バリ島』

関本紀美子訳, 平凡社, 1991年, 101頁).

- (16) *Kamus Bali-Indonesia*, Dinas Pendidikan Dasar Propinsi DATI I Bali, Denpasar, 1991, p. 699.
- (17) *Menggugat Bali*, Setia, P., Jakarta, 1986 (『ブトゥ・スティアのバリ案内』鏡味治也, 中村潔訳, 木犀社, 1994年, 428頁).
- (18) これはバントゥン (pantun) と呼ばれる脚韻をふむ四行詩の一種である。最初の二行は後に続く文を導くためのもので意味は軽く、皮肉や風刺が込められたものが多い。また、男女が即興で掛け合いをする場合もある。この四行詩の意味は「マンガスチンは外見はとても黒いけれど、中身は白くて甘い。それと同様に、肌の色の黒い娘でも中身はとても素敵である。たとえ肌の色が白かったり黄色かったりして見た目が美しくても、中身がどうしようもないこともある」という意味である。インドネシアでは色白の女性が美しいとする傾向がある。なお、バリ語による原文は次のとおりである。

Item-item tapuk manggis,
tamine bubut bungana,
selem sedap kenjung manis,
putih gading tara gunana, aruh putih gading tara gunana

- (19) カパス・アングンとは粘着性の樹液を使った愛の魔法で、その魔法にかかった者は魔法をかけた者のことが突然好きになり、離れられなくなるという。

(1999年10月1日 受理)